

地域の子どもたちの健やかな成長を願って

けんもり 特別支援教育だより

岡山県健康の森学園
支援学校
編集：教育支援係

第2号

平成28年6月17日

自閉スペクトラム症のある子への視覚支援入門

1 はじめに

岡山県総合教育センター研修講座「視覚支援入門講座」の講師を務めたことをきっかけに、視覚支援について日頃の取組を振り返る機会を得ました。本稿では、視覚支援の有効性や、絵カードの作成ポイント・活用法についてまとめた研修会資料の中から抜粋して記述します。



【絵カード例】

2 カードの有効性を実感した出来事

中学部のAくん。彼は、簡単な二語文は成立していました。その日の出来事を日記に書くこともできました。一方、「元気ですか。」と聞かれると「元気です。」と答えるなど尋ねられたことをそのまま答えてしまい、体調が悪い状態や痛い場所などを伝えることは難しかったです。

ある日の体育の前、体操服に着替えず、教室で大声を出したり、椅子を蹴ったりするなどいつもとは違うパニック状態になりました。そこでなぜそのような行動になったのか観察するうちに、体調不良が原因ではないかと考え、尋ねてみることにしました。言葉で尋ねたらオウム返しになってしまうので、筆談をしました。

T 先生と話ができますか？

C 『はい』『いいえ』の文字の『はい』に○。

T どこ（PICの絵カードを提示）が痛いですか。

C のどが痛いカードと指差しているカードを指差す。

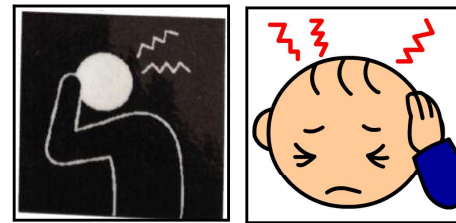
T のどが痛かったんだね。保健室に行きますか。

C 『はい』『いいえ』の文字の『はい』に○。

絵カードの使用が教育現場に浸透していない時期だったのですが、この時ほど「絵カードで伝えることができる」「絵カードで相手の思いを分かることができる」と思ったことはありません。



【イラスト例】



PIC

ドロップレット

3 デジカメとドロップレットの登場

平成13～14年頃になると、自閉スペクトラム症の方には、視覚で示すと伝わりやすいことが分かってきました。絵を描いて伝えたり、PICのシンボルマークを参考にして伝えたりしました。

時を同じくして、デジカメが急速に教育現場で使われ始めました。「これだよ。」「ここに行くよ。」などとデジカメにあらかじめ撮影しておいた写真を液晶画面に表示することで、これから行うことを視覚的に示すことが可能になりました。

平成20年頃からドロップレットを使い、絵カードを作成するようになりました。身の回りの物だけでなく、動作や日常の行動、様々な表情などカラーで示すことができるようになりました。

4 絵カードの3大活用法

(1) スケジュールや順番の提示

スケジュールや手順が分かれば、何をどうすればよいか見通しがたち、落ち着いた行動ができるようになります。学校では、一日のスケジュール、一週間のスケジュール、単元を組んだ活動のスケジュール、行事のスケジュールなど必要に応じてスケジュールを提示します。

よく料理の手順を示しますが、料理は食べる所で終わりではありません。片付けまでを提示する必要があります。



(2) 活動の手がかり

学習時間（国語・算数、ことば・かず）で積み重ねたことを日常生活の中で生かすことを考えます。

視覚的支援をヒントにし、やり方を理解します。やり方が理解できれば、一人でできるようになります。教師が牛乳瓶を籠に入れて配るようしていた児童が、手がかり（マス目を入れたホワイトボード）さえあれば必要な本数を籠に入れて牛乳瓶を配ることができるようになりました。現在は、数字を見て必要な本数の牛乳瓶を用意できるようになりました。



(3) 思いを伝える

「○○が欲しい」「○○がしたい」「○○が痛い」など気持ちを表出できるようにしたい時、2～3枚のカードの中から自分の気持ちに合うカードを選ぶことができます。周りの人に伝えることができれば、「分かってもらえた」「うれしい」など、言葉では表出することができなかった自分の気持ちを伝えることができます。また、「カードは役に立つ」という経験をすることができ、カードを用いて自分の思いや考えを伝えようとする意欲付けにもなります。その子の実態も変化していくので、絵カードが文字や数字になったり、カードが必要でなくなれば取り外したりしていけばよいのです。

5 自閉スペクトラム症のある子供たちにとっての絵カードとは

自閉スペクトラム症のある子供たちへの必要以上の言葉の指示は、子供たちを混乱させるだけです。視覚に訴えることで分かりやすくなります。音（言葉）は、消えてしまいます。絵カードは、目の前から消えることなく、ヒントになり、どうすればよいのかが分かります。分かれば一人ででき、一人でできれば自信がつきます。自信がつけば、子供たちはどんどん伸びていきます。

絵カードは、支援者が子供たちを管理するものではありません。絵カードでコントロールしようとしたら、子供たちに絵カードは不要なものとなります。ヒラヒラおもちゃになったり、破ったりされてしまいます。

絵カードを使うことが、本人にとって役に立つものでないといけません。気持ちを伝えられない子供たちが、絵カードで解決できる方法など、十分に理解した上で、一人一人に合った支援を惜しまず続けていかなければいけません。

6 おわりに

今では、紙媒体やラミネートした絵カードだけでなく、一日のスケジュールをタブレット端末に入れて示すようになりました。校外学習の時には効果を発揮し、スケジュールを必要な時に見ることができます。また、以前は、パソコンでデータを作成し、紙媒体に印刷した後ラミネートするなど多くの時間を要していましたが、タブレット端末でデータを作成しておけば、それを事前学習で提示するだけでなく校外学習に持って行くことができるので、大幅な校務の削減につながります。

これからも、その子供たちにとって、①分かりやすい、②役に立つ、③その子に合った、④カードが手掛かりとなり使うことが楽しいものになるよう絵カード（タブレットで作成した絵カードのスライドも含む）を作っていくと考えています。

（文責 小川正恵）